

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320066

研究課題名(和文) 日中比較による書学資料の文献学的研究

研究課題名(英文) Philological research comparing calligraphic studies of documents from Japan and China

研究代表者

菅野 智明 (KANNO, Chiaki)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：90272088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、書の史的研究を支える各種の資料(書学資料)の文献学的研究を、日本と中国の双方の比較を視野に推進するものである。研究の手順として、日・中ともに各時代の専攻者による個別的研究から着手し、それらの成果を随時比較検討することにした。比較を通して、書体や書風、材料と形式、原本と複製の関係などの諸論点において、各種書学資料の差異や共通点が明らかとなり、書学の関連諸領域への貢献のあり方を焦点化することも可能となった。

研究成果の概要(英文)：This research aims to develop a philological study of materials sustaining the historical approach toward calligraphy, shogaku siryo, by comparing documents from Japan and China. The method used was to compare the contributions of specific research conducted by researchers who specialized in various periods of Japanese and Chinese histories. A comparison of the font and style of calligraphy, materials and forms, originals and copies yielded differences and commonalities in various documents from both countries; an examination of these differences and commonalities demonstrated the contributions of related fields in the philological research on calligraphy.

研究分野：中国書学・中国書法史

キーワード：書学 書道史 文献学 資料学 日中比較

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の現状

書の史的研究は、これまで作品論、作家論、そして書論研究を主たる柱とし、相互の関連を図りつつ進められてきた。ただし、こと書論研究については、書の芸術性を論じた狭義の書の理論に重きが置かれる傾向にあった。例えば、既往の書論集成(『日本書論集成』『和刻本書画集成』ともに汲古書院、『中国書論大系』二玄社、『中国書画全書』上海書画出版社)等に選定される文献が、その傾向を如実に物語っている。

(2) 書論から書学資料へ

書学に貢献する文献資料は、狭義の書論のみにとどまらない。現在、著録(作品リスト)や題跋は、如上の書論集成で部分的に着目されてはいるが、雑多な内容が盛り込まれる筆記、日記、尺牘の類についても書学の上で注目される言説が多々認められるのであり、こうした文献についても、その夾雑性という難を克服し、書学の対象として積極的に顧みる必要がある。本研究では、狭義の書論に加え、こうした種々の関連文献を包括して「書学資料」と称し、主たる対象に据えることにする。

2. 研究の目的

(1) 書学資料の文献的性格

以上の書学資料について、本研究では、従来顧みられなかった稀覯な資料を重点的に発掘しつつ、文献学的な見地から、その性格を解明してゆくことを第一の目的とする。それが内容の解釈に際しても影響を与える可能性があるためである。この際、本研究では、内容は書学に関わらない一部の筆写文献も対象に加えてゆくことにする。それらを書の作品論として芸術性を問題にするのではなく、その「書きぶり」と文献的性格との相関という問題として捉え、広義の書学資料研究に加えてゆく。

(2) 各時代の日中比較

更に本研究では、上記の各書学資料にかかる個別の文献学的成果を、日本と中国、各時代によって進めつつ、最終的には、それら各地域・時代の成果を比較し、その関連性を明らかにしてゆく。比較を通して日中という地域性や、古代から近世・近代までの各時代性、或いはそれに左右されない普遍性など、各種書学資料を扱うに際し有用な文献学上の指標の帰納を目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究体制

本研究は、第一段階として、日中双方の各時代にそれぞれ精通する研究者(以下「メンバー」)が、個別的な書学資料の検討を進めてゆく。それを踏まえ、各自の検討結果を比較する討議の場を持つ。メンバーは以下のとおり。

研究代表者・菅野智明(研究の統括)、研究分担者・矢野千載(中国古代書学・日本近代書学)、研究分担者・山口恭子(日本近世書学)、研究分担者・尾川明穂(中国近世書学)、連携研究者・家入博徳(日本古代中世書学)、研究協力者・下田章平(中国および日本近代書学)、研究協力者・高橋佑太(中国近世書学)

(2) 個別的検討調査

まず各機関の所蔵目録等を収集・分析し、調査候補を洗い出す。調査機関と協議の上で、対象資料について書誌やそれに相当する各種文献学上のデータを採取・記録する。当該機関が許諾する範囲で、複写や撮影も行う。

文献学的検討

採取データに基づき、各資料の形式・版式その他、特に下記の点に留意し、分析を進める。

- ・執筆および出版における年代や地域
- ・附載跋や鑑蔵印を含めた遞蔵経緯
- ・肉筆資料における筆者(真贋問題)等

内容の検討

以上の分析を踏まえ、各資料における書学内容上の検討に移る。筆記や日記、尺牘等については、関連内容の特定・抽出とともに、当該部分の全体における位置を確認する。目録や伝記資料については、記述の体例に留意し、いずれの資料においても可能な範囲で当該部分の書学史・書論史的検討に着手する。

(3) 比較検討および成果の公開

メンバー間で相互に個別的成果を披瀝し、討議を重ねる中で、上述した地域・時代に起因する文献上の特性、或いはそれに左右されない普遍的な書学資料の特性について検討する。討議は、メンバーの他、関連の有識者、一般参加者も交え、積極的に公開してゆく。なお、各メンバーの個別的検討の成果は、『書学書道史研究』等、所属の学協会や機関における研究紀要において随時公表する。

4. 研究成果

(1) 個別的検討の成果

中国古代書学資料

矢野千載は、この時期の出土文字資料のうち、()里耶秦簡と()北京大学蔵西漢竹書に着目した。()の図録『里耶秦簡』(一)では、篆書と習字簡を取り上げた。従来、秦代の篆書は資料が乏しいため、始皇帝の文字統一は隸書を主としたという説が普及してきたが、里耶秦簡の篆書を分析することで、再検討が必要であるとした。習字簡では、書き手(下級書記官)の意識について考察し、それは行政文書のための練習に留まらず、書美を追求する要素が含まれると指摘した。()の図録『北京大学蔵西漢竹書』(二)は、遺例の少ない前漢武帝期の隸書で書かれた

『老子』を収める。その隷書書法の特徴を分析し、従来明確でなかった武帝期の隷変について、具体的にその一端を明らかにした。

中国近世書学資料

尾川明穂は、明末における書法観の特質について、従来注目されなかった資料を中心に据え検討した。まず、事跡不詳の湯臨初と伝えられる書論『書指』の筆者について、これを湯煥と定め、伝存量の多い董其昌の書論との比較を行った。湯に董理論の先駆けが認められること、また、董は同一評語ながらその意味を大きく変えて使用したことを確認した。かような状況を踏まえた上で、当時の各書人に通底する書法観を別括すべく、豊坊書論の稀観資料、即ち観峰館蔵『筆訣』初稿本や、銭鏡塘氏旧蔵の明代尺牘により、理論と書風の関連について検討した。うねる筆線や波発の追求と、隸・楷二体を明確に区分しない理論が窺え、清初～現在に見られない特徴的な思想の根幹を成していた可能性を指摘した。

高橋佑太は、清代書論のうち書法指南書に着眼した。特に一字を縦三格、横三格の計九格に分割して点画の位置を把握する九宮法に着目し、前掲の書論集成を用いて清代における展開を検討した。その結果、単に臨書の際の目安とする説(王澐や蔣驥)から、明確に敷き写しを推奨する説(魏錫曾や康有為)一字ではなく縦三字・横三字の計九字を対象とする大九宮説(包世臣)等への展開が見られ、そこには章法への強い意識、当時盛んに唱えられた摹書の推奨が反映されていることを導いた。また如上の議論が隆盛した要因として、前代の書論を多数収録する馮武『書法正伝』や戈守智『漢谿書法通解』が出版され、広く読まれたことが間接的に寄与していることを明らかにした。

中国近代書学資料

菅野智明は、この時期の書学を特色づける()影印出版物、()拓本鑑別書、()日中の書学入門書、といった資料に着目した。まず()については、鄧実が主導した国学保存会・神州国光社における肉筆書跡(筆写文字資料)の影印出版物について、『神州国光集』(上海図書館蔵)等を分析し、鄧が先駆的に学域横断的立場から多角的な視点で筆写文字資料を捉えていたことを明らかにした。

()については、草創期の拓本鑑別専著『校碑隨筆』を対象に、その稀観な版本、すなわち宣統二年本(上海図書館蔵)、増補重校改正版(東洋文庫蔵)を比較検討し、同著の増補が、清末から民国初期にかけての金石学および書学環境が、激変する様を端的に示している点を明らかにした。()については、陳彬龢『中国文字与書法』が洪川玄耳『文字・書道』の漢訳増補版であることを明らかにしつつ、陳書の漢訳が、日中の書における近代的学域再編の幅や漸次性を象徴的に示すも

のであることを導いた。

下田章平は、古名跡「汝南公主墓誌銘稿真蹟卷」(上海博物館蔵)の題跋・収蔵印に着目し、完顔景賢コレクションの基盤が清末の端方との交流によって形成されたことを明らかにした。

日本古代・中世書学資料

家入博徳は、この時期における能書の家である世尊寺家の書写活動に着目し、書論の発掘と検証を行った。はじめに、これまで未翻刻であった世尊寺行能著とされる『歌書書様』(岡山大学附属図書館蔵)を翻刻するとともに、行能と和歌との関わりから、『歌書書様』も行能著としてもよいのではないかという見解に至った。次に、行能著とされる『行能卿家伝仮名遣』及び当時の仮名遣書の分析から、仮名遣いに対し行能は意識的であったのではないかと考えられた。最後に、世尊寺家初代である藤原伊行の書論『夜鶴庭訓抄』と伊行自筆資料との対応関係の分析から、書論における規範を書写において順守していることを明らかにした。

日本近世書学資料

山口恭子は、()松花堂昭乗、および門弟の書、()近世における書の出版物に着目した。()では、『詠歌大概』(国文学研究資料館蔵)について、昭乗真筆本として認めうることを、所収秀歌撰「新歌仙三十六人哥」本文が、現存する同系統諸本のうち最善本であることを指摘した。また、昭乗の書を模刻した慶安2年刊『和漢朗詠集』について、当初瀧本流門弟に向けた私的出版物として卷子本で制作された後、昭乗筆跡へのニーズに応え冊子本に形態を変え流通していったことを指摘した。そして、これまで未紹介であった昭乗、豊蔵坊信海筆『百官名』(法政大学図書館蔵)を紹介し、瀧本流を継承し青蓮院流をもよくした信海の象徴的作品であることを明らかにした。()では、本阿弥光悦書風で印刷された『歌仙大和抄』(国会図書館等蔵)を検討し、「三十六歌仙和歌」の流行と光悦筆跡への需要の高さが本書の刊行を促したことを指摘した。

日本近代書学資料

矢野千載は、この時期に活躍した高村光太郎に着目した。光太郎揮毫の賢治詩碑(雨二モマケズ)の碑銘稿が展覧会で初公開されたことをうけ(図録『宮沢賢治・詩と絵の宇宙』)、詩碑と碑銘稿を比較検討した。その結果、詩碑の文字には碑銘稿とは異なる行草書化された文字があり、それ以外にも文字の大きさや字配りを調整していることが判明した。また、この詩碑とは別の賢治詩碑用に、光太郎が揮毫した未刻の碑銘稿(雨二モマケズ)も現存する。この第二の賢治詩碑のための揮毫に関する経緯と状況は、『高村光太郎全集』『高村光太郎山居七年』に関連する記述があ

る。それらから当時の光太郎の心理面と天候をもとに、二つの碑銘稿の書風の特徴を明らかにした。

下田章平は、()書簡、()美術・書道雑誌、()遺族収蔵資料といった零細文献に着目し、書画碑帖収蔵に関わる近代日中の収蔵家や書画売買の仲介者の動向について検討した。()については、大村西崖宛中国人書簡(東京芸術大学美術学部教育資料編纂室所蔵)を分析し、西崖をはじめとする日中文化人の介在によって日本に将来された書画碑帖があることを解明した。()については、『文字』、『書道及画道』等の雑誌や菊池惺堂氏遺族提供の資料によって、関東大震災で多くを烏有に帰した惺堂コレクションの復元的検討を試みた。

(2) 比較検討の成果

国際シンポジウム「近代書学の越境 資料が語る日中の墨交」の開催
標記は、大妻女子大学教授・松村茂樹氏の科研費プロジェクト「呉昌碩と日本人土」との合同企画として、2013年8月17日に同大で開催した。内容は、海外の有識者による招待講演と、講演講師および松村氏・菅野をパネリストとするシンポジウムで構成した。講師と演題は以下のとおり。
白謙慎氏(ボストン大学教授)「晩清官僚の応酬書法」
張恵儀氏(香港中文大学講師)「『流沙墜簡』の出版と民国初期における中国書壇の反響」
またパネリストから、松村氏「近代日本における正鋒意識と呉昌碩の重要性」と菅野(下掲5〔学会発表〕)の提言があった。
各家の講演・提言では、日記や出土文書、あるいは影印資料といった多彩な書学資料とその研究事例が提起され、一般参加者を交えた討議では、これら各資料の特質を踏まえた分析の要諦について、意見が交わされた。

国際シンポジウム「書の資料学 故宮からの問い」の開催

最終年度となる2015年度は、本研究の締め括りとして、標記シンポジウムを開催した(9月12日、於:筑波大学東京キャンパス)。内容は、メンバーによる研究発表、海外招聘講師による基調講演、招聘講師およびメンバーによる討議、といった三部構成とした。招聘講師と演題は下記のとおり。
何炎泉氏(国立故宮博物院書画処副研究員兼科長)「『石渠宝笈三編』に見る碑帖と碑学の関係についての初探」
陳建志氏(国立故宮博物院書画処助理研究員)「書は人を以て伝う—趙孟頫書「絶交書」の考察」

同日の研究発表は、下掲5〔学会発表〕に加え、研究協力者の高橋も発表した。また討議における登壇者の提言は、下掲5〔学会発表〕のほか、連携研究者の家入からも提言があった。

この日のシンポジウムでは、上記に引き続き、多彩な書学資料の研究事例が提起され、討議では、それらを種々の視点から関連づけて、特に

- ・書学資料の範疇の再確認
 - ・金石著録、書画著録における拓本の扱い
 - ・文学テキストに対する書学の貢献の可能性(真贋の鑑定を中心として)
- など、各資料に通底し得る問題について、集中的な議論がなされた。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計21件)

菅野智明、東海廟残碑の諸論点、中国近現代文化研究、査読有、17号、2016、pp.62 - 70

山口恭子、慶安二年刊卷子本『和漢朗詠集』について 松花堂昭乗筆本の開版をめぐって、日本文学誌要、査読無、91号、2015、pp.40 - 55

矢野千載、北京大学蔵西漢竹書『老子』に見る書法と隷変に関する一考察、日本文学会誌、査読無、27号、2015、pp.45 - 52

菅野智明、翻訳書としての陳彬蘇『中国文字与書法』 近代中国の「整理国故」における美術と書、そして日本、美術史、査読有、179号、2015、pp.1 - 16

家入博徳、宮内庁三の丸尚蔵館蔵伝俊成筆『古今和歌集』の書誌と本文、書学書道史研究、査読有、25号、2015、pp.85 - 94

菅野智明、筆写文字資料の影印に対する近代的認識の一斑 鄧実の出版活動を中心に、中国近現代文化研究、査読有、15号、2014、pp.51 - 85

矢野千載、高村光太郎書「雨二モマケズ」詩碑の碑銘稿について、日本文学会誌、査読無、26号、2014、pp.54 - 62

山口恭子、『歌仙大和抄』と本阿弥光悦流手本の刊行、法政大学文学部紀要、査読無、68号、2014、pp.37 - 53

菅野智明、「帖学期」・「碑学期」再考 清代に著された書法史論の高潮期について、書論、査読有、40号、2014、pp.118 - 133

家入博徳、藤原伊行の書写規範意識とその実態、研究と資料、査読無、72輯、2014、pp.15 - 19

菅野智明、静嘉堂文庫蔵『金壺記』による影写をめぐって、金壺集 石田肇教授退休記念金石書学論叢、査読無、2013、pp.134 - 153

矢野千載、里耶秦代簡牘に見る篆書と習字簡、日本文学会誌、査読無、25号、2013、pp.35 - 48

山口恭子、瀧本流高弟としての豊蔵坊信海 松花堂昭乗・豊蔵坊信海筆『百官名』を中心に、国文学論考、査読無、49号、2013、pp.52 - 65

尾川明穂、湯臨初(湯煥)『書指』に見ら

れる生熟説と「法」語使用、金壺集 石田肇教授退休記念金石書学論叢、査読無、2013、pp.121 - 133
菅野智明、『校碑随筆』の支援者たち、第九届中国書法史論研討会論文集、査読無、2013、pp.241 - 261
家入博徳、書論と仮名遣い、研究と資料、査読無、70号、2013、pp.13 - 19
尾川明穂、歴代書跡に対する董其昌の鑑定・評価基準—楮摹系「蘭亭序」に近似する一群の書跡の存在から、書学書道史研究、査読有、23号、2013、pp.35 - 48
家入博徳、世尊寺行能の和歌に対する書写意識 付・岡山大学附属図書館蔵『世尊寺家歌書書様』翻字、研究と資料、査読無、68輯、2012、pp.1 - 8

〔学会発表〕(計18件)

尾川明穂、明末における書体論の諸相、国際シンポジウム「書の資料学 故宮からの問い」、2015年9月12日、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)
山口恭子、松花堂昭乗筆『詠歌大概』(国文学研究資料館蔵)所収秀歌撰について、国際シンポジウム「書の資料学 故宮からの問い」、2015年9月12日、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)
矢野千載、高村光太郎書「雨ニモマケズ」詩碑に見られる原文および碑銘稿との相違について、国際シンポジウム「書の資料学 故宮からの問い」、2015年9月12日、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)
矢野千載、北京大学蔵西漢竹書《老子》の書法と隷変初探、簡帛文字と書法学術研討会、2015年4月11日、潤沢嘉業大酒店(中国北京市)
尾川明穂、董其昌書論における生熟説について、平成26年度中国地区全国大学書道学会、2014年12月13日、善通寺(香川県善通寺市)
山口恭子、瀧本流の『和漢朗詠集』について 慶安二年刊巻子本『和漢朗詠集』を中心に、平成25年度松花堂昭乗研究所研究報告会、2014年3月16日、松花堂美術館(京都府八幡市)
菅野智明、鄧実にみる筆写文字資料の影印出版について、中国文化学会、2014年3月8日、大妻女子大学(東京都千代田区)
尾川明穂、董其昌が目指した「平淡」「離」の書法、第35回書論研究会大会、2013年8月18日、澄懷堂美術館(三重県四日市市)
菅野智明、筆写文字資料の影印に対する近代的認識の一斑、国際シンポジウム「近代書学の越境 資料が語る日中の墨交」、2013年8月17日、大妻女子大学(東京都千代田区)
菅野智明、『校碑随筆』の支援者たち、中国近現代文化研究会、2013年7月21日、大妻女子大学(東京都千代田区)

尾川明穂、湯臨初(湯煥)『書指』に見られる生熟説と「法」語使用、中国地区書道学会、2012年12月15日、サンラポーむらくも(島根県松江市)
矢野千載、里耶秦代簡牘に見る秦代書法多様な秦隸、簡牘上の小篆、楚簡との関わりを中心に、第23回書学書道史学会大会、2012年11月18日、別府大学(大分県別府市)
尾川明穂、歴代書跡に対する董其昌の鑑定・評価基準 楮摹系「蘭亭序」に近似する一群の書跡の存在から、第23回書学書道史学会大会、2012年11月18日、別府大学(大分県別府市)

〔図書〕(計2件)

尾川明穂 他、国立故宮博物院、妙合神離 董其昌書画特展(董其昌的書論 理論創出背後之原動力的探討)、2016、400(350 - 363)
山口恭子 他、出光美術館、書の流儀(江戸時代の書と出版)、2016、111(78 - 79)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野 智明 (KANNO, Chiaki)
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：90272088

(2) 研究分担者

山口 恭子 (YAMAGUCHI, Kyoko)
都留文科大学・文学部・講師
研究者番号：10536428

矢野 千載 (YANO, Senzai)
盛岡大学・文学部・教授
研究者番号：20326705

尾川 明穂 (OGAWA, Akiho)
安田女子大学・文学部・助教
研究者番号：20630908

(3) 連携研究者

家入 博徳 (IEIRI, Hironori)
國學院大學・文学部・講師
研究者番号：20586507

(4) 研究協力者

下田 章平 (SHIMODA, Shohei)
高橋 佑太 (TAKAHASHI, Yuta)